こんなんしてます。

わだいのしごと

130

忘れられた学校

炭窯跡調査

担当している「熊野フィールド体験」の集中講義で、古座川町で炭窯跡の調査を行いました。炭焼きさんの子どもだった古老の記憶を頼りに、炭窯跡を見つけると、GPSで位置を記録、サイズの測量や状態の記録を行い、さらに集落からの距離、炭窯間の距離、自然環境などを加えたデータから、炭窯立地に関する条件の解析を行うというもの。和大の教員2人と地元の北大研究林の教職員、学生20名が班に分かれ、谷を上り、沢を渡り、獣道をよじ登りと炭窯を捜して山に入りました。

平井川上流部から旧大塔村との境界に至る山中には、多くの炭窯跡が残り、石積みの外壁や天井など完璧な姿を残すもの、崩れながらも炭窯の痕跡を残すものなど、半世紀以上の時を経てもそこには生業（なりわい）の息吹が確かにありました。

学生らは35基もの炭窯跡を見つけ、宿舎である北大研究林庁舎の研修室で夜を徹してデータ整理にかかりました。たった4日間の集中講義ですが、産業の痕跡を自ら探し追体験しデータを分析することで、単に地図と数字情報や文献情報だけではない、深い社会調査の方法を学ぶことが目的です。実感は知識を本物にしてくれます。

炭焼きさんの学校

「あそこが学校跡だ」と、谷沿いのこんもりとした森を古老が指さしました。平井川最上流部の玉の谷に存在した玉の川家庭学級のことです。

明治以降の学校変遷史をまとめた『熊野の廃校』（湯崎、中島共著、2015）を出版し、家庭学級の存在は確認していましたが詳細は不明でした。家庭学級は、山村へき地や親の仕事の事情で通学できない子らのために簡易的に設けた学校のこと。玉の川家庭学級は、山に暮らす炭焼きさんの子どもが通った学校でした。

かつて炭焼きさんは、原木のある山に窯を造り、製炭しそれを里に運び、周辺の木を切り尽くすと山を移動し、またそこに窯を造り製炭をする、という移動の民でした。奥深い山村では子どもは貴重な働き手で、小学生でも1俵15キロの炭俵を2つも背負い、里に運んだといいます。

明治時代、学校制度の草創期には、家庭学級、村落小学、夜学校、簡易小学、子守学校など、暮らしの実情に合わせ、融通のきく変則的な学校がありました。簡易小学には貧民学校という直截（ちょくせつ）な通称もありました。子守り学校は赤子をおぶって学校に来ざるを得ない女児を集めた学校です。

家庭教授所とも呼ばれた学校の資料は少なく、実態はよくわかりませんが、古座川の僻村であった小森川や赤木、樫山、楠にも家庭教授所があり、いずれも大正時代の初期に廃止か本校の分教場となり、正規の学校制度の中に統合されていきました。

玉の川家庭学級跡地は、樹木に囲まれた谷沿いの平地に、わずかな石組みを残してありました。ここに学校があったという記憶をもつ住民もほとんどいなくなりました。

学生らが、パソコンの地図上にマッピングした炭窯の分布を見ると、古座川が製炭業の盛んな地であったという既成の情報が、深い山中で営まれたリアルな生業と暮らしの姿となって理解されたのでした。

石を組み土を運び窯を造り、木を切り炭を焼く。力強く繊細な暮らしの技能です。天井の赤土が抜けようとも頑強な石組みの外壁を残す炭窯跡が、今も存在感を放ち、親の側で山の学校に集う子らの姿も見えるようでした。

忘れられた学校であり炭窯ですが、暮らしの歴史と事実をたくさん伝えてくれていました。

玉の川家庭学級跡地

プロフィル

湯崎真梨子（ゆざき　まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター　教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。